

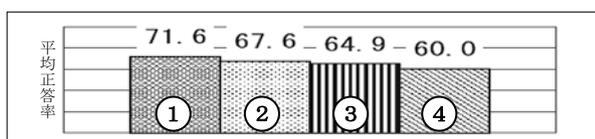
## 児童生徒の学習意欲の向上のために

### 県教育庁教育振興部学習指導課義務教育指導室

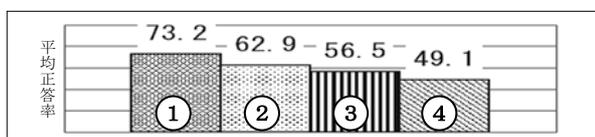
#### 1 令和5年度の全国学力・学習状況調査の 千葉県の結果から

令和5年4月18日に行われた全国学力・学習状況調査では、実施された各教科の学習意欲に関する調査も行われている。ここでは、「各教科を好きか」の質問項目を抽出し、平均正答率との相関を示す。

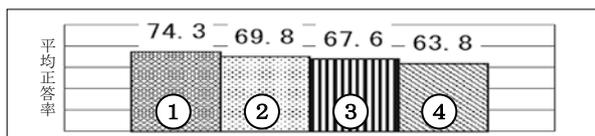
〔小学校・国語〕



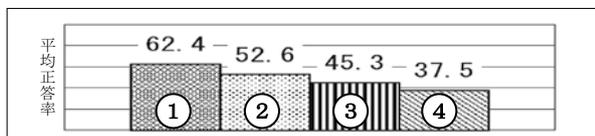
〔小学校・算数〕



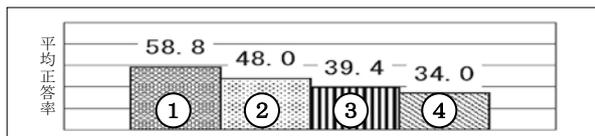
〔中学校・国語〕



〔中学校・数学〕



〔中学校・英語〕



(その教科を「好きか」について、グラフの左から①「当てはまる」、②「どちらかといえば、当てはまる」、③「どちらかといえば、当てはまらない」、④「当てはまらない」。数字は平均正答率。)

小学校及び中学校の各教科において、その教科が「好き」と肯定的に回答した児童生徒ほど、平均正答率が高い傾向がグラフから分かる。

各教科において、その教科を好きになることが、学力向上につながると考えられる。学力向上には、学習意欲の向上が必要である。

#### 2 「学力向上」総合プランについて

県では、児童生徒の学力向上を図るために、令和2年に第3期千葉県教育振興基本計画「次世代へ光り輝く『教育立県ちば』プラン」が策定されたことを受け、「ちばっ子『学力向上』総合プラン(ダブル・アクション+ONE)」を策定した。

「ダブル・アクション+ONE」は、子供たちの学ぶ意欲の向上を図る「アクション1」と教員の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図る「アクション2」の2つを推進し、「+ONE」の取組により、ダブル・アクションの取組をチェックすることで、千葉県の子供たちの学力向上を目指している。

ここでは、特に「児童生徒の学ぶ意欲の向上」を図る「アクション1」の主な事業について紹介する。

##### (1) 子供たちの主体的な学び促進事業

県独自の学習教材「ちばっ子チャレンジ100」(小学校)、「ちばのやる気学習ガイド」(中学校)、「『家庭学習のすすめ』サイト」の整備充実を図り、これらの教材を活用した



児童生徒の主体的な学びを支援している。MEXCBT（メクビット）での活用もできるので、授業中はもちろんのこと、家庭学習でも活用していただきたい。令和5年度は、「ちばっ子チャレンジ100」「ちばのやる気学習ガイド」の国語と理科の問題を改訂した。

## (2)魅力ある専門分野の人材活用事業

各分野において優れた知識・技能を持つ人材を特別非常勤講師として配置し、各教科、特別の教科である道徳、外国語活動、総合的な学習の時間（プログラミング教育含む）及び小学校のクラブ活動で興味・関心の多様化に応じた授業を行うことにより、児童生徒の学習意欲の向上を図っている。

また、算数、理科、体育及び図画工作の専科指導を行うための「小学校専科非常勤講師等」を配置し、指導者の専門性を生かした授業を行うことにより、児童の学ぶ意欲や学力の向上を図っている。今年度から来年度にかけて、効果検証を行っているところである。

他にも「千葉県学習サポーター派遣事業」「グローバル化に対応した英語教育の充実事業」「先進的教育活動による学ぶ意欲向上事業」「ICT活用教育の充実事業」の取組を進め、児童生徒の学習意欲の向上を図っている。詳細は、右の二次元コードで



## 3 学習意欲の向上には

ジョン・ハッティ著「教育の効果」（2018年、図書文化社）には、次のような内容が示されている。

「Dörnyei（2001）によると、学習者が有能さを感じているとき、自律性を十分に感じているとき、やりがいのある目標を設定したとき、適切な評価を得たとき、そして、他者か

ら認められたときに、動機付けは最も高くなると述べている。」「Ross（1988）は、学習者自身が学習のコントロール方法を身に付けることの効果に関する研究のメタ分析を行い、学習のコントロール方法を身に付けた度合いと学力の相関が高いことを示した。」

つまり、児童生徒が主体的に学習に取り組み、教師や友達から適切な評価を得ることで学習意欲が高まり、児童生徒自身が学習を調整していく方法を身に付ければ、学力向上につながるということである。

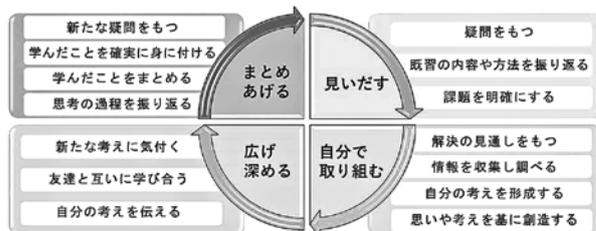
## 4 「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラムの活用を

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のため、県では、「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラムの活用を推進している。

この実践モデルプログラムの学習過程「見いだす」「自分で取り組む」「広げ深める」「まとめあげる」を、児童生徒自身が取り組めるようになれば、学習意欲が向上し、学力もそれに伴い向上していくはずである。

そのためには、教師も児童生徒も、この学習過程を意識して日々の授業に取り組んでいく必要がある。

「児童生徒の学習意欲の向上」と「教員の授業改善」は密接につながっているのである。



実践モデルプログラム

## 児童生徒の学習意欲の向上と教師の授業力

帝京平成大学人文社会学部児童学科（小学校・特別支援コース）

教授 佐瀬 一生



### 1 「わかる」「できる」の重要性

まず、問いから入ろう。枠内の（ ）に入る語句を答えてほしい。

学校教育は児童生徒の「生きる力（生きて働く知・徳・体のバランスの取れた力）」を育むことを理念とする。このうち知は「確かな学力」である。「確かな学力」は学校教育法第30条2項で「学力の3要素」として示されている（①）、（②）、（③）の3つから成る。

そして現学習指導要領では（④）、（⑤）、（⑥）が「育成すべき資質・能力の三本の柱」として重視されている。

教職教養のイロハである。現職教師の皆さんは、当然答えられると思う（答えられないと困る）。しかし、答えられたからそれでOK、ということでは全くない。

ここで本当に問いたいのは「覚えているか」ではなく、自分が「わかっているか」「できているか」である。語句を覚えている、その定義を暗唱できる、だけでは意味がない。「生きる力」も「確かな学力」も「主体的・対話的で深い学び」も、教師自身が自分で咀嚼し理解して（わかって）いるか、その理解に基づき教育活動（授業）の中で子供たちを相手に実践化して（できて）いるか、それが子供たちの+（プラス）の変容に確かにつながっているか、が重要なのである。それがつまり「授業力」ということになる。自分がどうなのか、ぜひ振り返ってみていただきたい。

### 2 「授業」と学習意欲

毎日、5～6単位時間行う「授業」という時間。貴方が行っている「授業」の時間は、子供たちにとってどんな時間になっているだろうか？

授業は端的に言えば、子供たちにとって「おもしろく、力がつく」ものである。しかし残念ながらそうではない「授業」も存在する。

「おもしろくない、（しかし）力はつく」と言う。「おもしろい、（しかし）力はつかない」ものは「（単なるその場限りの）お遊び」である。そして「おもしろくない、力もつかない」のは「（大いなる）時間潰し」でしかない。あなたの「授業」は、はたしてどれか？

学習意欲とは「主体的に学習に取り組む態度」であり「学びに向かう力」である。もっと端的に言えば「やる気」である。学習意欲（やる気）は「学びの推進エネルギー」であり、学力のスパイラル発展の中心であると考えられる。そして「授業」の在り方・やり方で大きく増減する。

現実として、授業中に「ただそこにいる」だけで無気力・無関心に過ごす子供たちの姿がある。それを「仕方ない」で片付けてはいけない。かつて佐藤学は「学びからの逃走」を論じたが、近年はその姿が学年・学校種・地域を問わず、さらに「ごく普通」に見られる。はっきり言おう。子供たちの学習意欲の低下も「授業」の積み重ねであり、教師（たち）の授業力不足に依るところも大きい。



### 3 授業力向上への「授業実践の基盤」

とは言え、高い授業力を初めから持っている教師などいない。授業を構想・計画し、実践し、振り返り次に繋げていく「授業のPDCA」を、日々の営みを通して重ねる中で少しずつ少しずつ身に付いていくものである。加えて、自ら求めて様々な場や方法で学ぶ中でステップアップしていくものである。

ベテラン層も含め、研修等で聞くと「授業力に自信がある」という方はそう多くない。謙遜もあるだろうが、自身の授業実践の基盤（拠所・芯）が不明確である様子も伺える。

以下、筆者自身の考える「授業実践の基盤」から二つ紹介する。もし共感されたら使っていただきたい。もちろん批判も大いにしてほしい（その場合は対案を持って）。

#### (1)指導のベクトル

学校教育における子供たちへの指導には大きな「ベクトル」がある。それは「直接指導から見守りへ」である（図1）。

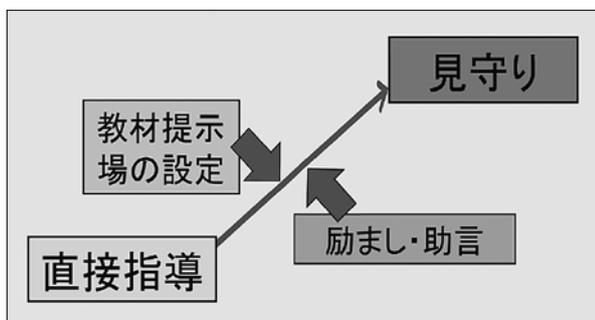


図1：指導のベクトル

小学校入学当初は教師からの直接的な指示・指導が多いのは当然だが、学年が進むにつれ、子供自身の選択・判断に委ねる部分を多くしていくことが求められる。そのために教師は目の前の子供（たち）の状況を丁寧に見取り、何を直接指導し何を子供自身に委ねるかを考え、現状より+1に繋げる手立てを施していく。その手立てが「具体的な学習活動（場・活動・形態等）の設定」「子供（たち）

が前に進む関わり（助言・励まし等）」の2面である。ここを誤ると、過保護や放任などの「-（マイナス）の指導」になってしまう。

#### (2)MUST思考とMAY・CAN思考

これらは教師の子供たちへの基本姿勢としての考え方（スタンス）である。基本的に、MUSTは「～しなければならない」、MAYは「～してもよい」、CANは「～できる」の意味である（英語教師の皆さんに「そんな単純じゃない」と叱られそうだがお許しいただきたい）。

MUST思考は子供たちに「～しないとダメ」といった指導を基調とする。-面に目を向け、-を+に変えようとする考え方である。勿論、それが必要な場面はある。しかし「～しないとダメ」系の言葉は言う教師もいい気持ちはしないし（いい気持ちなら教師をやめよう）、言われる子供（たち）はさらに嫌なものである。これが度重なると、子供（たち）は人格否定されていると感じるようになる。

一方、MAY・CAN思考は+面に目を向け、それを伸ばして周囲に広げていく考え方である。「～してもよい」「～できる」を認め、「したこと」を認め価値付けし、「～してよかった」「～できた」を実感させていく。言う教師も気持ちがいいし、言われる子供（たち）は承認されて自信を持ち、次への意欲も高まっていく。小さな+でも、それが積み重なると「+の歯車」が連鎖反応を示してどんどん回り、大きな成長に繋がる。

多くの教師は子供（たち）の「わかった」「できた」を認める指導の大切さを知っている。しかし、+面より-面に目が行きやすいものである。実際の指導の中で、意識無意識を問わずMUST基調の教師は案外多い。

MAY・CAN思考を実践化する上でも、子供たちを見取る力が極めて重要である。

#### 4 授業の4力と23のコンピテンシー

「授業力」とは「授業実践力」「授業指導力」「授業経営力」等とも言われる、言わば「授業をする力」である。なお、この「授業をする」はPDCAのそれぞれであり一連である。

授業力の具体について、一つの論をここに示す。「授業の4力と23のコンピテンシー」である。10数年前の研究だが、筆者自身は自分の考えの柱の一つとしている。全国の「授業の達人」と言われる教師にインタビューして、「授業における重要な事柄」を話していただいた中からキーワードを抽出し類型整理したものである（表1）。

23の視点（コンピテンシー）を四つのカテゴリー（4力）に類型している。紙幅の都合で一つ一つの詳細な説明は省くが、授業をする時に何を大事にするか、のポイントはわかるだろう。「私なら…」と自身の授業を想起してみしてほしい。各人が「私はこれとこれを大事にしている」「確かにこれも大事だな」等、確認できるのではないだろうか。

「4力」のうち、「授業コミュニケーション力」「一瞬の対応力」「意欲向上力」は授業の「やり方」、「授業構成力」は「あり方」である。「やり方」だけではHow-toで終わる。根っことしての確かな「あり方」あってこそ、様々な「やり方」が生きてくるのである。

例えば、授業中の子供の発言に「どう返していいかわからない」と相談を受けることが

時々ある。その「返し」の方法は千差万別あるが、「返しの意味は何か？」を考えれば適切な方法は見えてくる。その意味は「認める」「確認する」「さらに促す」「子供の言葉をつないで広げ、深める」といったことである。

この「あり方」に基づくと、「返し」の基本は例えば、①頷き、②相槌、③オウム返し、④問い返し、の4つが挙げられる。これらの「返し」は「授業コミュニケーション力」「一瞬の対応力」の多くの項に関わることが分かるだろう。自身が行っている種々の手立てについても同様に考え意味付けてみてほしい。

#### 5 「学習意欲を高める」ということ

「学習意欲」というと、とにかく授業の導入部を話題にすることが多い。しかし、学習意欲は授業（学習活動）の全てにわたるものである。そこで、授業を大きく「導入」「展開」「まとめ」の3段階に分け、各段階での「学習意欲を高める」ことについて述べる。

導入では「おもしろそうだ」「なぜだろう」「やってみよう」といった興味関心や疑問を持たせることが重要である。とともに、それらを学習問題に集約させ、学習の見通しを持たせて展開部に繋げていく。この学習問題が子供たち自身の問題意識や切実感・必要感から導かれたものであるかが重要である。子供たちにとって、教師が学習問題を唐突に提示する授業は、以降が「先生に付き合う（付き合わされる）時間」に陥ってしまう。

学習問題は基本的な「WHY型（なぜ～）」「HOW型（どのような（に）～）」に加え、近年は「Let's型（～しよう）」が極めて多い。しかし安直にLet's型で済ませていると感じる授業

授業の4力	23のコンピテンシー				
授業コミュニケーション力	1) きく	2) みる	3) 話す	4) 対話育成	5) 自由な雰囲気づくり
一瞬の対応力	6) 一瞬の対応	7) 発問	8) ゆさぶり	9) ほめる叱る	10) つぶやきを拾う
意欲向上力	11) 主体性	12) ささやき	13) 興味関心	14) コーモア	15) やる意義
	16) 体験	17) 導入	18) 課題		
授業構成力	19) 教材探し	20) 省察	21) 授業構成	22) 教材研究	23) 学習習慣

図2：授業の4力と23のコンピテンシー



も少なくない。

展開では、学習問題を受けてまとめに繋げるために、様々な形態と活動を組み合わせて進めていく。例えば「個別で調べ、ペアやグループで話し合って意見をまとめ、全体で発表し合って整理する」といった場合、それらも子供たちにとって必要感があるか、が重要である。「対話的な学び」としてペア・グループを重視している学校も多いが、子供たち自身の必要感がないと「やらされ活動」になってしまう。また、「やってよかった」という充実感・達成感・満足感が重要である。それらが自信となり、「またやりたい」という次への意欲になる。

まとめでは、学習問題に対応するまとめとなっているか、が問われる。WHY型では「なぜならば～」、HOW型では「このような(に)～」となる。そしてLet's型では「～した結果、〇〇がわかった(いえる、大事だ)」まで繋げることが大事である。そうでないと活動しっ放しで終わってしまうことになる。また、「なぜそのまとめになるのか」が子供たちにとって必然性があることも大事である。唐突に教師が「今日のまとめはこれです」としてよいものではない。

学習の流れに沿って述べてきたが、全体を通して共通することがわかっただろうか。

それは、問題意識・切実感・必要感・充実感・達成感・満足感・必然性などを子供たちが持てる、ということである。そして、教師からの押し付けでなく「自分たちが進めている、つくった」と思える、ということである。それらを実感しながら「何をどうすればよいか」がわかると子供たちは自ら動く(動ける)のである。つまり、その学習が子供たちにとって「自分事」であることが大事なのである。それこそが「主体的」な学びと言える。

## 6 授業力向上の手立て

授業力向上に有効な手立てを三つ挙げる。

まず「授業をみる」ことである。同僚教師や他校の教師の授業を日常や研究授業から、また教育関係WEBページやDVD教材などからみて学び、自分の授業改善に繋げる姿勢を実践化・習慣化することである。「授業をみる力」は自身の「授業をする力」に連動する。

そして「授業をみてもらう」ことである。他の教師等にどんどんみてもらい、どんどん意見を言ってもらって、その意見を授業改善に生かす。即ち「公開と批判」である。

授業力は独りよがりでは向上しない。他に学ぶ謙虚な姿勢こそが授業力を向上させる。

その最大の「他」は子供たちである。子供たちの反応をよくみて、声を聞くことが大きな学びになる。筆者は研究授業等の参観時、授業終了後すぐに数名の子供に「今日の授業はどうだった?」と聞く。子供の言葉は最大の授業評価だと毎回強く実感している。

## 7 まとめ

「生きる力」「確かな学力」の育成。それは子供たちの学習意欲、自ら学ぶ姿勢を高めることに尽きると筆者は考えている。

最後に強調したいのは教師自身の「学ぶ姿勢」である。学ぶ姿勢を持つ教師から、学ぶ子供が育つ。逆に言うと、学ばない教師からは学ぶ子供は育たない。貴方はどうか?

### 《参考図書》

- 佐藤学 『「学び」から逃走する子どもたち』 岩波ブックレット、2000
- 千葉市教育センター 『達人に学ぶ授業力』 宮坂印刷、2010
- 明石要一他 『初任者教員の悩みに答える』 教育評論社、2011
- 七條正典他 『教員としてのホップ・ステップ』 美巧社、2017